

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 180号

平成29年4月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (12)

12月2日

しかし、わがしもベイスラエルよ、わたしの選んだヤコブ、わが友アブラハムの子孫よ、私は地の果から、あなたを連れてき、地のすみずみから、あなたを召して、あなたに言った、「あなたは、わたしのしもべ、わたしは、あなたを選んで捨てなかった」と。恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。(イザヤ書 41・8-10)

境遇の強うるところとなりて事を行えば、その事必ず成功す。みずから境遇を作りて事をおこなえば、その事必ず失敗に終わる。みずから求めずして来る境遇は神の声なり。みずから計画(たくら)みて作りし境遇はおのが声なり。神意は必ず成り、我意は必ず敗る。成功の秘訣は、神に強いられざれば起(た)たざるにあり。

12月5日

わたしたちは四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰らない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、私たちの死ぬべき肉体に現れるためである。(コリント第2書4・8-11)

恐るべからざるものの第1は失敗である。失敗は、方針を転ぜよとの神の命令である。われらは失敗を重ねて、神の定めたまいにしわが天職につくのである。

恐るべからざるものの第2は患難である。患難は、われらを神のふところに追いやるための彼のむちである。われらは患難に会って、神のわれらのために設けたまいにし休息(いこい)の牧場(まきば)に入るのである。

恐るべからざるものの第3は、死である。死は、聖められし靈魂の純金を、肉の汚物より分離するための最後の手術である。われらは死を経過して、神の、聖者のために備えたまいにし光栄(みさかえ)の聖国(みくに)に行くのである。

12月8日

この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって、御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである。(ローマ書1・2-4)

キリストを最高位に置くキリスト教、聖書の敬虔なる研究を促すキリスト教、人の罪あることを認め、大胆にこれを唱道するキリスト教、キリストの、罪をあがのうの能力を信じ、その宝血に万民の科(とが)を消滅する能力のあることを宣ぶるのキリスト教、肉体の復活を信じ、その信仰の上にすべての希望を築くのキリスト教、これらはすべて聖書にかない、すなわちキリスト教の建設者の意にかのうたるキリスト教であると思います。もし人がこれだけを信じますれば、彼が天主教であろうが、ギリシャ教徒であろうが、あるいはバプチスト(浸礼派)であろうが、メソジストであろうが、「長老」であろうが、ギリシャ教徒であろうが、「監督」であろうが、われらは深くとがむるに及ばないと思います。また、もし以上の教義を全身全力をもって信じますれば、彼は宗派の人たるをやめて、すなわち真正のカトリック(「広量」の意)信者となるであろうと思います。

...

12月10日

そこでイエスは彼らに答えられた、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」。(ヨハネ伝5・17)

信仰の人は常に休んで常に働く者であります。自分の能力を消費するのではありませんから、少しも疲れません。しかし実際に自分を通して能力が人に臨むのでありますから、自分は働いているのと同然であります。これが理想的生涯ではありませんか。「休まずに急がずに」とゲーテの作った有名なる詩にありますが、詩人の理想以上の事をクリスチャンは毎日実験しているのであります。信ずれば新たなる能力が加わり、新たなる能力をもって、じっとしていることができなくなるのであります。ヨハネ伝7章38節に、イエスが呼ばわりて「われを信ずる者は、聖書にしるしごとくに、その腹より、生ける水、川のごとくに流れ出ずるべし」と言いたまいたりと書いてありますが、事実はそのとおりであります。ほんとうにキリストを信じて、すなわち全身全霊を彼に信(まか)せて彼は生命の水の貯水池となりて、多くの渴ける靈魂をうるおすのであります。

12月16日

しかし、そのあかしを受け入れる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。神がおつかわしになった方は、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。御子を信じる者は永遠の命を持つ。御子に従わないものは、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである。(ヨハ

ネ伝3・33-36)

神は不公平である。この世の朽ちる者、すなわち金銀、土地、家屋の分配においてははなはだ不公平である。しかし神が人類に与えたもう最も善き賜物、すなわち聖霊の灌漑(そそぎ)においては公平である。否、かえって貧者に厚くして富者に薄いように見える。われらは決して憂うべきではない。われら、身は卑しく、位は無くも、全能の神の王子となることができる。喜ぶべきではないか。

12月18日

しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。… (ロマ書5・8-9)

贖罪は余のいづく思想ではない。余の奉ずる教義ではない。世の署名せし信仰個条ではない。余の実験である。余のよって救われし理由である。余の信仰の土台石である。これなくして、余に安心はないのである。余の信仰はむなしくして余はなお罪におるのである。余はもちろん余の善行によって救われるのではない。余の悔い改めによって救われるのではない。また余の信仰によって救われるものでもない。余は、神がキリストにありて成就(なすと)げたまひし罪の消滅によって救われるるのである。まことに救いは少しも余が側にあるのではない。まったく神の側においてあるのである。余の心理状態にあるのではない。彼の代贖的行為によるのである。キリストは、余がなお罪人としてありし時に、余のために死にたまうたのである。余の救いは、余のいまだ知らざりし時に、余のためにすでに成し就げられたのである。しかして余は単にその救いを認めてこれに入ったにすぎないのである。

12月19日

あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。それは、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりである。(コリント第1書1・30-31)

信仰が足らぬとて、または無いとて、歎く信者が多くある。しかし、かかる信者はキリスト教の信仰の何であるかを知らないのである。キリスト教の信仰は、確信であるとか信力であるとかいう自分の力ではないのである。キリスト教の信仰は信頼である。自分以外のある者にたよる事である。彼の義、彼の聖、彼の贖を仰いで、もってわがものとなすことである。ゆえに、わが信仰はあってはならないのである。わが信仰は無いほうが良いのである。我は無一物、無能力になりて、彼によりてのみ生きんと欲して、われは真(まこと)の信仰の無いのを嘆くべきではない。無いのをかえって喜ぶべきである。無いからやむを得ず、たよるのである。そうして、頼って、真の信仰を得るのである。信仰のこの秘訣を知って、われらは信仰の欠乏をすら歎かざるに至るのである。

12月24日

その時、キリストに会って死んだ人々がまず最初によみがえり、それから生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。(テサロニケ第1書4・16-17)

クリスマスはことに友人を思うの時である。そしてわれらの友人の内で多くはすでに主にありて眠ったのである。われらは地上に残されてクリスマスを守るも、彼らがわれらと共におらざるがゆえに堪えがたき歎きを感じるのである。われらと共に楽しきクリスマスを守りし者は、今はその愛する姿をわれらの間に見せないのである。…そして、かかるときにパウロの言葉が一層強く我らの心に響き渡るのである。

兄弟よ、なんじらの歎きは他の人(世人)のごとくならざらんことを願う。

と。われら愛する者に別れて地上に寂しきクリスマスを守るといえども、それはいつまでも続くことではない。「イエスによれるところのすでに眠れる者を、神、彼と共に携え来たりたまわん」(テサロニケ第1書4・14)と。なんと大なる慰めではないか。われらは再び彼らと共に楽しきクリスマスを守る事ができるのであるという。天国におけるクリスマス、それがほんとうのクリスマスである。



12月29日

これらの人は皆、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを自ら言いあらわした。そう言いあらわすことによって、彼らがふるさとを求めていることを示している。もしその出てきた所のことを考えていたなら、帰る機会があったであろう。しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。(ヘブル書 11・13-16)

そうして信仰の進歩とともに今世はますます軽くなりて、来世はますます重くなるのであります。身は今なお幕のこなたにとどまりますが、心はすでにかなたに移りて、その栄光を感ずるのであります。そうしてかなたに厚くなればなるほど、こなたに薄くなるのであります。この栄光の国の、わがために備えられしを知りて、私どもはこの世の欲望(のぞみ)が日々薄らいでくるのであります。そうして耳にかすかにその音楽を聴き、目にかすかにその輝きを望みて、私どもの心は飛び立つのであります。しかり、幕一枚であります。そうしてすべての誘惑(こころみ)は終わるのであります。すべての涙はぬぐわるるのであります。イエスを面前(まのあたり)拝しまつるのであります。愛する者に再会するのであります。すべての疑問が解けるのであります。すべての誤解が氷解するのであります。…

12月31日

主に感謝し、そのみ名を呼び、そのみわざをもろもろの民の中に知らせよ。主にむかって歌え、主をほめ歌え。そのもろもろのくすしきみわざを語れ。その聖なるみ名を誇れ。どうか主を求める者の心が喜ぶように。(歴代志上 16・8-10)

年は去らんとす。感謝である。年は来たらんとす。感謝である。

今年もまた善きことがあった。感謝である。悪しきことがあった。

感謝である。万事万物が感謝である。何ゆえにしかるか？神の聖旨(み

こころ)が成ったからである。彼の栄光(みさかえ)が揚がったからで

ある。「わが」ための生涯ではない。「神」のための一生である。彼

の聖旨のならんがためには、我はどうなってもよいのである。神は

主人であって、われはしもべである。しもべは、自分はどうなっ

ても、主人の事業さえ挙げれば、それで喜びかつ満足するのである。

神は年年歳歳、その聖業(みしごと)を進めたもう。そうして今年も

また1年だけ聖旨は成り、栄光は挙げた。ゆえに感謝である。わ

が不幸、わが損失のごとき、問うべきではない。いわんや少なから

ざる幸福の、わが身にも臨みしにおいてをや。